

イケメン理系の溺愛方程式

Aoi & Sbinya

古野一花

Ichika Furuya

eternity



エタニティ文庫

目次

イケメン理系の溺愛方程式

5

書き下ろし番外編

世界一の絶景

341

イケメン理系の溺愛方程式

改札を抜けると、夜の空気に混じる甘い香りが鼻孔をくすぐる。

早いもので、今年も金木屋の季節がやってきた。

秋の訪れを感じさせる香りを楽しみながら、中森葵は軽い足取りでアパートへの道のりをたどり始めた。

土曜日である今日は、大学時代の仲間たちと女子会をした。大学を卒業して、気が付けば社会人も三年目だ。仕事はどんどん忙しくなるし、人間関係の難しさも感じている。そんな日々の中、一緒に話して共感し合うだけで、明日からも頑張ろう、とやる気が湧いてくるのだから、友人というのは本当にありがたい存在だ。

ふふ、楽しかった。

賑やかな女子会の余韻に、気持ちがあふわあふわしている。

しばらくするとフェンスで囲まれた広大な敷地が現れた。その一角にはフェンスに沿って見事な金木屋の生け垣があり、小さなオレンジ色の花が今を盛りと咲きこぼれて

いる。濃密になった甘い香りに足を止め、葵はすつと鼻から空気を吸い込んだ。

ああ、いい香り。

自然と頬を緩めて顔を上げると、そこには見慣れた建物がある。葵の勤務先である海山ホームプロダクツだ。一般家庭向けの洗剤や歯ブラシ、入浴剤などの日用品を企画、製造、販売する会社で、本社は東京にある。葵の働くここ富士波工場は、入浴剤などのお風呂に関連する製品を主に扱っている。

金木屋の生け垣は、会社の敷地内に併設された植物園に植えられているものだった。そこでは、香料や薬効の成分を含む様々な草花が栽培されており、商品開発に活かされている。

夜空に浮かぶ建物のシルエットを見つめながら、葵はそつとつぶやいた。

「私も仕事、頑張らなくちゃ」

憧れの会社で働いているのだもの。仕事の忙しさや煩わしい人間関係なんかには負けてはいられない。

明日一日しっかり休んで、月曜日に備えよう。

気合を入れてこくりと頷き、勢いよく歩き始めた葵だったが――

「きゃっ！ な、なにっ？」

数歩も進まぬうちに、何かに足がぶつかって悲鳴を上げた。よろけながらも何とかフ

エンスに掴まると、背後でドサリと音がする。慌てて振り返ったら地面に男性が倒れていた。

「ううっ……」

直後、低い呻き声が聞こえてくる。どうやら、電柱の陰に座り込んでいた人を勢いよく蹴り倒してしまっただけらしい。

「す、すみません！」

焦って助け起こそうとした瞬間、葵は思わず顔を背けてしまった。

うわ、お酒くさっ。

甘い金木屋の香りに負けないほど強烈なアルコールの匂いがする。

やだ、酔っ払いじゃない。もう……どうしてこんなところにいるのよ。

できれば関わり合いたくない。いくら葵が平均より背が高く、色気のないパンツ姿であっても、一応若い女だ。

だけど……もしケガでもしていたら……

つい、おせっかいの血が騒ぎ始める。

ああ、仕方がない。自分が蹴っ飛ばしてしまったのだ。さすがにこのまま知らん顔で立ち去るわけにはいかないだろう。

「あのお……」

葵は恐る恐る、歩道に転がったままの男の顔を覗き込んだ。と、瞬時に目が釘づけになっってしまう。

うわあ、すっごいイケメン……

こんなところで寝転がっているのが信じられないほど整った顔に言葉を失った。相手が目を閉じているのをいいことに、葵はしげしげと男の様子を観察してしまう。

年齢は三十前後だろうか。二十五歳の葵より年上に思えた。少し長めの髪を後ろでひとつに束ね、すっきりと額を出している。外灯の明かりに照らされ、男の彫りの深さが際立って見えた。

身に着けているシャツやパンツはシンプルなデザインだが一見して仕立ての良さがわかる。男はどことなく垢ぬけた雰囲気を持っており、ファッション関係の仕事にイメージさせた。手足も長いし、これだけ綺麗な顔をしているのだ。男性モデル——なんてこともあり得るかもしれない。

そこで葵はハッと我に返った。

……いけない。のんびり目の保養をしている場合じゃなかった！

くたりと力の抜けた男の様子は、酔って眠っているようにしか見えない。葵が蹴り倒したせいで気絶している、なんてことはないと思うが、万が一ということもある。

気は進まないが、ここはきちんと確認しておいた方がいいだろう。

意を決した葵は、地面に転がる男の肩を軽く揺すってみる。

「すみません。大丈夫ですか？」

身体を揺すられたせいとか、酔っ払い男が薄く目を開けた。葵はほっと安堵の息をつく。

「……ん？ 誰……」

男はほんやりと葵を見つめたものの、また目を閉じてしまう。葵は急いで声を大きくした。

「どこか痛いところありませんか？ 歩けます？」

「……ん」

男が歩道に投げ出した長い脚を動かした。

「よかった。じゃあ家に帰れますね」

「……家？」

男は緩慢な動きで上半身を起こし、左右に目をやって小さくつぶやいた。

「家は……どこだ？」

「えっ、私を知るわけじゃないじゃないですか。あなたの家ですよ。どこですか？」

葵にそう問いかけられた男は、わずかに首を捻りながらほつりと言った。

「どえる……ふじなみ……」

「どえる、ふじなみ？ ……って、海の近くにある高級マンションのドエル富士波です

か？」

「……そう。……そう……」

不明瞭な言葉を聞きとろうと、葵が男の口元に耳を寄せると、低い声が鼓膜を震わせた。

「ああ、いい匂いだ」

耳元に温かな吐息を感じた次の瞬間、男の手が葵の頬を包み込む。そして、柔らかいものが首筋に触れた。

「ひゅっ——」

まるでそこから電気でも流されたかのように身体がびくつと震え、葵は大慌てで身を起こす。

い、今の、もしかして……唇？

酔っ払いはボンヤリとした眼差しを葵に向け、手を伸ばしたままうっとりとろとろと囁く。

「凄いな……」

嬉しそうに微笑むイケメンに心臓がドクツと跳ねた。

一瞬だけ触れた男の手と唇は熱かった。そして、じっと葵を見つめる彼の視線も熱を持っていて。それを意識した途端、金縛りにあったみたいにその場から動けなくなった。知らず身体が火照ってくる。

「もっとだ」

男はふらりと上体を揺らすと、傍らにしゃがみ込む葵の太ももにくたりと頭を預け、そのまま長い両腕を腰に回してきた。

「いい……匂い」

すうつと息を吸い込んだ男が恍惚とした様子で繰り返す。

葵の心臓は早鐘を打っていた。身体も火照る一方だ。

だが、戸惑う葵の口から出たのは、拒絶の声ではなく膝の上の男に対する問いかけだった。

「いい匂い……って何が？」

男からの返事はない。葵はドキマギしながら自分の身体に鼻を寄せて匂いを嗅ぎ……気が付いた。

ああ、金木犀のことか。

目の前に茂る金木犀を見上げて、葵は苦笑いする。大きく深呼吸をして胸いっぱい甘い香りを吸い込んで落ち着きを取り戻した。

いくらイケメンだからって、こんなへべれけの酔っ払いにドキドキするなんて……

自分に呆れながら、葵は思わずため息を漏らしてしまう。

車が一台、目の前を通り過ぎ、ヘッドライトが男の姿を明るく照らし出した。男は幸

せそうな笑みを浮かべてすっきり眠り込んでいる。

見た限りどこもケガをしている様子はなく、ただ泥酔しているだけだと思われた。これなら葵に責任はないだろう。だけど、膝の上で気持ち良さそうに寝息を立てている男を、このまま放置して立ち去る気にはなれなかった。

とりあえず男の住まいはわかっている。ドエル富士波は葵のアパートへ帰る途中だ。蹴り倒してしまったことは、やはり申し訳なく感じるし、ついだと思つて送つていこう。

こうして葵はバッグから携帯電話を取り出し、タクシーを呼んだのだった。

「お姉さん、親切だねえ」

事情を聞いたタクシーの運転手から半分呆れたように言われた。

「地面に寝てる酔っ払いを見つけたら、今度は警察に連絡しなさいね」

そう言いながらも運転手は、足元のおぼつかない男をタクシーの後部座席に座らせるのを手伝ってくれた。葵一人ではどうも無理だっただろう。

タクシーでドエル富士波に到着し、フロントにいた男性に状況を説明し酔っ払い男を引き取ってもらう。千鳥足の男が連れて行かれる様子を見送った葵は、ホッと肩の力を抜いてその場を後にした。

アパートにたどり着き、後ろ手にドアを閉めた葵は、大きく息をはき出した。

「いつまでドキドキしているのよ」

首筋に残る男の唇の感触が、どうにも消えてくれない。

今更ながら途方に暮れた。

何で自分は逃げなかったのだろう。知らない男の人にあんなことをされたのだ。いつもだったら悲鳴を上げて逃げ出していたに違いない。

それは……驚きはしたけれど、少しもイヤだと感じなかったせいだろう。

なぜ？ 相手がイケメンだったから？ 私ったらそんなにミィハーだった？

ぎゅつと目を閉じると、瞼の裏に男の姿が浮かんでくる。

驚くほど整った容姿、モデルみたいにセンスの良い服装、葵に伸ばされた手も指が長くて綺麗だった。へべれけに酔っ払っているのにどこか洗練された雰囲気があって、育ちの良さを感じさせた。それが葵の警戒心を薄れさせたのかもしれない。

頭の中はあの人のことではいっぱいになっている。

葵はドアにもたれたまま、男の唇が触れた首筋にそつと指先を当てた。すると、あの瞬間の痺れるような感覚がまざまざと蘇ってきて、胸がきゅうつと苦しくなってしまう。

まったく……二十五にもなつて……名前も知らない酔っ払い男に舞い上がるなんてどうしちゃったのだろう。もしかして、長いこと恋人がいなせいだろうか？

——ヤダ、葵ったら、カレシと別れてから五年も一人でいるの？

今日の女子会で友人に言われたセリフを思い出す。そう言われて初めて、もう五年も色恋沙汰から遠ざかっていることに気付き、自分でもびっくりした。

なんだか情けなくなつてきて、がっくりと項垂れてしまう。

「確かにイケメンだったけど……助けたのはそのせいじゃないからね……」

思わず、自分に言い訳するみたいにつぶやいていた。

蹴り倒してしまつた引け目から、あのまま放っておけなかっただけだ。別にイケメンに恩を売ったかっただとか、彼とどうこうなるうと思つた訳じゃない。

「それに、高級マンションに住むイケメンなんて、私とは違う世界の人間だからね」
きつともう会うことはないだろう。だいたいあちだつて、葵のことなんて覚えてないに決まっている。だつてあんなに酔っ払つていたんだもの。

いつまでも浮ついてないで、大好きなお風呂に入つて、彼のことは忘れてしまつた方がいい。

「さて、今日の入浴剤は何にしよう」

無理やりイケメン酔っ払いを頭の中から追い出し、ようやく葵は玄関から家が上がつたのだつた。

月曜日。海山ホームプロダクツの総務部庶務課に出勤した葵は、早速、朝の日課であ

る掃除に取りかかった。

葵の所属する庶務課には、課長以下、先輩正社員の丸尾と葵、パートの渡辺と江田島の五人がいる。パートの女性二人は十年以上ここで働いているベテランだ。社員といえども、入社三年目の葵がここでは一番の下っ端のため、朝は早めに出社するよう心がけていた。

ぎゅうぎゅうにファイルが詰まった窓辺の棚をハンディモップで撫でる。そうしながら窓の外に視線を向けると、目の前にある植物園の緑のグラデーションとすっきりした秋空が眩しかった。

すでに植物園の左奥に建つ温室のドアが開放されている。

「おはようございます」

その時、よく通る女性の声が庶務課に響き渡った。条件反射でたちまち葵の背筋がピンと伸びる。先輩の丸尾だ。葵はすぐさま出入口を振り向いて挨拶した。

「おはようございます」

ピンクのブラウスに紺のふんわりとしたスカート姿の丸尾は、今日も実に華やかだ。

栗色の巻き髪をビーズ付きの大きなバレッタで留め、耳元には洒落たアクセサリーが煌めいている。彼女がいるだけで部屋の中がぱっと明るくなるみたいだ。それに比べて……

葵は思わず自分の姿を見下ろしてしまった。

今日の葵はクリーム色のブラウスに濃いグレーのパンツを合わせている。我ながら地味なことこの上ない。しかも、ブラウスはオフィスの壁の色、パンツは床の色にそっくりだった。

これではまるで擬態みたいだ……

気が付いてしまった事実に軽くショックを受けたものの、すぐにこれでいいのだと思わず。

擬態とは、生物が自然界で目立たぬように周辺の環境を真似ることを言う。

そう考えると、極力目立たぬように、と思案して選んでいる葵の服装は、まさしく擬態ルックと言えるだろう。仕事中の葵は、常に地味な服装に最低限の化粧を施し、長めの黒髪を一つにまとめてパソコン用のメガネをかけている。言うなれば地味な事務員という擬態だ。

こんな葵ではあるが、昔からずっとこうだったわけではない。かつては華やかだと言われていた時期もあった。

背が高く、顔のパーツがはっきりしている葵は、きちんとメイクをするとかなり派手な印象になる。その上で着飾ったりすれば、否応なく人の目を引く。

大学生になったばかりの頃、それを自覚した葵は、流行のファッションをチェックし

では着飾り、人からお洒落だと誉められるのが何より嬉しかった。
ところが、そのせいで迷惑な男に目を付けられ、葵は酷く悩むことになる。さらに追
い打ちをかけるように、男に媚びる八方美人と自分が噂されていると知って、大きな
ショックを受けた。

何かを頼まれると、誰にでもすぐに手を貸していたのが仇になったらしい。常識的な
挨拶や気遣いまで打算があるように言われて、すっかりトラウマになってしまった。
それ以来、葵は自分を飾ることをすっぱり止めた。

お洒落がしたくないわけではない。しかし、目立って変に誤解されるくらいなら、誰
の目にも留まらない方がいい。そう判断したのだ。

おかげでこれまでのところ、平穩に働くことができている。

ついイヤな過去を思い出していた葵は、丸尾の声で我に返った。

「うわー、今日はやけに多いわねー」

目を向けると、丸尾がうんざりした様子で、カウンターに載る各種届け出用紙の入っ
たケースを覗き込んでいる。

週末、庶務課は休みだが、別の課では出勤する従業員もいる。その間に何かしらの書
類が提出され、月曜の朝に溜まっていることがある。

「中森さん。掃除はあなたにまかせて、私、こっちの処理を始めてもいいかしら？」

丸尾がケースを指差しながら、葵に声をかけてきた。

「はい。お願いします」

「中森さんは掃除が終わったら、郵便の仕分けをお願いします」

目を移せば、カウンターの隅に郵便物が積まれている。

「わかりました」

葵の返事に頷くと、丸尾はケースの中の書類の束をがばっと掴んで自席に向かった。

葵は、きびきびと歩く小柄な丸尾の背中を見送り、止まっていた手を動かし始める。

入社六年目の丸尾は、お洒落で華やかな女性だ。

さらにその仕事ぶりは、スピーディーで正確。三年目の葵は、一刻も早く彼女に追い
つけるよう奮闘しているものの、なかなか思うようにならないのが現実である。落ち込
みそうになる気持ちも、そっと息をはいて切り替える。

葵は手早く掃除を終わらせ、急いで郵便物の仕分けに取りかかった。

庶務課の仕事は、他部署の人々が会社でスムーズに活動できるようにサポートするこ
とだ。備品や社用車の管理に始まり、コピー機などの事務機器の不調や、自動販売機に
お金を入れたのに品物が出てこない——なんて苦情にまで幅広く対応する。

今日もあれこれと忙しく業務をこなしているうちに、あつという間に昼休みになった。
休憩時間といえども、庶務課を完全に空っぽにするわけにはいかない。そこで女性陣

は二手に分かれ、休憩時間をずらして取るようにしていた。

先に休憩に行っていたパートの二人が戻ったので、入れ替わりで葵と丸尾が席を立つ。その時、書類に印を押しながら課長が声を上げた。

「中森さん！ ちょっと待って。悪いけど、休憩行く前にこれ届けてって。明日の工場見学の変更だから急ぎなんだよ。頼むね」

書類の届け先は受付と守衛室の二か所だ。社員食堂と同じ一階にあるが少し遠回りになっってしまう。

葵は内心の喜びが顔に出ないように気を付けながら、丸尾の方を見た。

「すみません丸尾さん、今日は先に社食に行ってください」

控えめにそう申し出ると、丸尾は何でもないことみたいに首を横に振る。

「届けるのなんて五分もかからないでしょ。一緒に行くわ」

「そ、そうですか。ありがとうございます……」

笑みを浮かべつつ、心の中ががっかりする。葵は下を向き、課長から書類を受け取った。憂鬱な足取りで丸尾と一緒に一階へ向かう。

実はこのところ、丸尾と過ごす昼休みが、苦痛な時間になることが多いのだ。

決して丸尾が嫌いなわけではない。厳しい人だけど頼れる先輩だし、尊敬もしている。けれど葵には、丸尾と一緒に昼休みを過ごしたくない理由があった。

その原因は、丸尾の同期で営業部に所属する男性社員にある。

その男性社員——五十嵐は、女性に接する際の態度が軽々しいという、葵が最も苦手とするタイプなのだ。

丸尾と仲の良い五十嵐は、社員食堂で彼女を見かけると必ず近寄って来る。そして丸尾と一緒にいる葵をからかうのだ。五十嵐にはカノジョがいるというのに、まるで葵に気があるような言動をしてくるのである。

さらに厄介なのは、五十嵐が何気に女子社員から人気があるということだ。五十嵐が葵を構うたびに感じる女子社員たちの視線——それが葵にとってはなにより恐ろしかった。

そのせいで、葵は余計に目立つまいとして地味さにもますます拍車がかかってしまった。だっだっ。

今日は会わないといいな……

ついつい足取りが重くなり、すたすたと先を行く丸尾から離れてしまう。葵は慌てて歩く速度を上げた。

課長に頼まれた用事を済ますため、まずは守衛室に書類を届けに行く。続けて受付に向かうと、前方から白衣姿の男性が近づいてくるのが見えた。その姿に、葵は思わず瞬きを繰り返してしまう。

——ボサボサ頭の変人科学者。

マンガなどで見かけるわかりやすい科学者のイメージそのまんまだ。

「あら、珍しい。久しぶりに見たわ」

同じく男に気付いた丸尾が小さくつぶやいた。葵はつい小声になって尋ねる。

「丸尾さん、知っている人ですか？」

「うちの社員だったことぐらいはね。確か私より一年先輩のはずよ。でも、あっちは院卒でしょうから、年はもっと上かな」

「へえ。白衣ってことは、研究棟の人ですか？」

「そう。確か入浴剤開発室の所属だったはず。減多に実験室から出てこないって噂なのよ」

郵便や宅配で届いた荷物を、各部署に配るのは庶務課の仕事だ。葵も何度か入浴剤開発室の事務スペースに行ったことがあるが、これまで彼を見かけたことはなかった。

「知る人ぞ知る有名人なのよ。ほら、あの通り、かなりインパクトのある外見でしょう？」

丸尾の言葉に納得して頷くと、葵はまじまじと白衣姿の男を見つめた。

どうやら彼は、手に持った書類に没頭しているようだ。背中を丸めて、手元を見たまぶつぶつと何かつぶやいている。

くせのある肩までの黒髪が顔を隠していて、表情はほとんど見えない。

近くまで来た時、書類を持つ男のちよつと骨ばった長い指に葵の目が吸い寄せられた。

あつ、きれいな手……

よく見ると……すらりと背が高く肩幅も広い。マンガの登場人物みたいなインパクトのある外見とのギャップに、葵は少しだけ違和感を持った。

「おつかれさまです」

すれ違いざま、葵たちは控えめに彼に声をかけた。すると、顔を伏せたままの男は、半テンポ遅れて返事をしてくる。

「……ああ、おつかつ——」

突然言葉を切った男が、弾かれたように顔を上げた。持っていた書類をバサバサと床に落とす。そのうちの一枚がひらりと葵の足元で止まった。

それを拾って葵が顔を上げると、男はこちらを向いたまま、ぼーっと立ち尽くしていた。彼の足元には、落とした書類が散らばったままだ。

仕方がないなあ。

葵は手早く男の足元に落ちている書類を拾い上げると、まとめて彼に向かって差し出した。

「どうぞ」

しかし、なぜか相手は受け取ろうとしない。どうしたんだろう？

葵は首を傾げて男の様子をうかがった。長い前髪の隙間から黒縁メガネがちらつと見えたが、表情まではわからない。

次の瞬間、男が大きく息を吸い込んだ。さらに犬のように鼻をフンフンと鳴らし始める。

ええっ、何？ もしかして……匂いを嗅いでいる!?

男の予想外の行動に、葵は思わず一步下がってしまった。

「行きましょう」

丸尾の鋭い声に、ハツとした葵は、慌てて拾った紙の束を男に押し付ける。男はそれを受け取ったものの、何も言わずに突っ立ったままで、まるで放心状態だ。

やっぱり見た目通り、ちよつとヘンかも……。これは関わらない方がよさそうだ。

そう判断し、葵は丸尾と一緒に急いでその場を離れたのだった。

受付カウンターにたどり着くと、「おつかれさまです」と受付嬢が華やかな笑みで迎えてくれた。

「おつかれさまです。明日の工場見学の変更書類です」

「ありがとうございます」

今日は工場見学がなかったのか、受付前のロビーはガラシとしていた。

本社と違って取引先の間人が訪ねて来ることは少ないが、その代わり、工場見学にやってくる人たちがロビーに列をなしていることもある。

用事は終わった。さあ社食へ――

そう思った時、丸尾のつぶやきが聞こえてきた。

「海の湯シリーズが少ないわね……」

見ると彼女は、受付カウンターの隣に置かれたショーケースを覗いている。このケースに商品を補充するのも庶務課の仕事だ。来たついでにチェックしていくあたりは、さすがである。

ショーケースの中にはこの工場で作られた商品をメインに、海山ホームプロダクツの主力商品が並べられていた。これらの商品は販売もされていて、工場見学に来てくれた人たちがよく購入していつてくれる。実は社員割引があるので、ここで購入する社員も多い。かくいう葵もその一人だ。

葵はもともと海山ホームプロダクツの入浴剤のファンだった。だから、こうして憧れの会社で働けることに大きな喜びを感じている。

受付嬢がカウンターから出てきて、丸尾と一緒にショーケースを覗き込んだ。

「ああ、最近まで暑かったですからね。でもそろそろ山の湯シリーズの季節です」

入浴剤のラインナップには、昔からの定番商品である海の湯と山の湯の各シリーズの他、一年前に新しく加わった草の湯シリーズがある。

海の湯はクールタイプの入浴剤なので夏によく売れる。逆に保温や保湿の効果が高い山の湯は、夏には若干売り上げが落ち込む。とはいえ、多くの香りを持つ山の湯は通年で高い売り上げを誇る人気商品だ。しかし……

「草の湯はちっとも減らないわねえ」

丸尾が声を低くした。それを聞いた葵の眉間にシワが寄る。

「値段がねえ……」

受付嬢は困ったような笑みを浮かべたあと、葵の方を向いた。

「でも、社内が一番草の湯を買ってくれているの、中森さんなんですよ」

「やっぱり」

葵がちよくちよく草の湯を買っているのを知っている丸尾が、呆れたような顔をする。「だって、草の湯って素晴らしいじゃないですか！ そう思いますよね？」

葵は入浴剤にはかなりうるさい。そんな葵のここ最近の一番のお気に入り草の湯だった。

「素晴らしいのは認めるけど、値段が倍よ」

「でもその分、生薬の成分がたっぷり入って——」

思わず草の湯の素晴らしさを力説しようとした葵の口が止まった。丸尾と受付嬢の背後に、こちらに向かって勢いよく走って来る白衣が見えたからだ。

まさか……と思った次の瞬間には、先ほどの白衣男が葵の目の前に立ちふさがっていた。

葵は前髪で半分隠れた男の顔を嘩然としたまま見上げる。

息を切らした男が、震える声で言った。

「これは、奇跡だ……」

男の口元に笑みが広がっていくのを茫然と眺めていた葵は、次の瞬間、強く抱き締められていた。

「ひっ……！」

あまりの予想外な展開に葵の喉からおかしな声漏れる。全身を硬直させる葵に構わず、男は葵の首元に顔を埋め、鼻からすーっと息を吸い込んだ。

「君だ。間違いない。それにしてもこの匂いは……」

抱き締められたまま耳元で囁かれ、葵の全身に震えが走る。

「ちよ、ちよっと、あなた——何してるの！」

その時、狼狽した丸尾の声が聞こえてきて、葵はハッと我に返った。慌てて白衣の男の胸を両手で押す。すると男は、あっさりと葵を解放した。

よるめきながら男から距離を取る葵の横に、さっと丸尾が並んでくれる。
男はと言うと、この場の緊張した空気に気付いた様子もなく、平然と口を開いた。
「何って、体臭を確認しただけだ」

「た、体臭？」

思わず声を上げ、葵は眉をひそめる。

「エソロジでは体臭はパートナーを探す時に重要な情報源となる。知らないのか？」

「エソロジ？」

「動物行動学だ」

そこへ丸尾が訝しげな声を挟んできた。

「それって、いい匂いの異性とは相性がいい、って説のこと？」

「そうだ。体臭を心地よく感じる異性とは遺伝的に遠い。ゆえに交配すると種の多様性が高まり、強い子孫が残せる」

男は白衣の胸を反らせて興奮したように続ける。

「つまり、君と俺とは遺伝子的に高レベルで相性がいいということだ」

出し抜けに始まった話に、上手く理解が追いつかない。瞬きを繰り返していた葵は、再びずいっと近寄った男に首から下がる社員証を掴まれた。

「そういうわけで——ええっと、総務部庶務課の中森葵」

白衣男は社員証を読み上げ、高らかに言い放った。

「俺と結婚してくれ」

は？ け、結婚!?

男の言葉を理解するや否や、葵は彼の手から社員証をひたたくり、首を振って後退ざりした。

この人、変……変人に間違いない！

白衣を着た男は、葵に向かって腕を伸ばしてくる。その白衣を、男の背後にいた受付嬢が咄嗟に掴んで引き止めてくれた。葵はその隙に、丸尾に手を引っぱられるようにして、駆け出したのだった。

トレーを持って社食のテーブルに着くなり、丸尾はジュースのバックにストローを挿してジュースと吸い込んだ。そして、はっと大きく息をつくとき、ぽつりと言った。

「びっくりしたわね」

「……はい」

葵は茫然としたまま頷く。先ほどの男の言葉を思い出し、ぐっと眉を寄せる。
体臭のせいでは結婚？ 冗談だよな？ いくら何でも有り得ない。

「私、からかわれたんでしょうか？」

初対面の男からいきなりプロポーズされるなんて、からかわれているとしか思えない。いや、むしろ冗談やからかいであってほしかった。

定食を食べ始めた丸尾は、もぐもぐと口を動かしながらも、真面目な顔で考える。

「うーん、あの人、開発にいるくらいだからガチガチの理系よね。そういうタイプってあんなからかい方はしないんじゃないかしら？ 冗談みたいだけど、大真面目に言ってる気がするわ」

「そんな……」

葵が青くなると、丸尾は諭すように言った。

「とりあえず、害がないうちは放っておけばいいんじゃない。もしまた何か言ってきたも、嫌ならはつきりと断ればいいだけだし」

確かにその通りだ。葵だって自分から関わりたいとは思わない。

衝撃が大きすぎたせいか、あまり食欲はなかったが、午後の仕事のためにも食べなくてはいけない。葵は無理やり目の前のうどんを口に運び始めた。その時――

「中森ちゃん、見つけっけ」

頭の上から降ってきた男の声に、葵はギクッと背中を揺らした。直後、隣の席に定食の載ったトレーがガシャリと置かれる。

「今日はまた一段と景色に溶け込んでるなあ。見つけるのに苦労したよ」

別に、見つけてくれなくてもよかったのに……

ちらりと横を見上げると、営業部の五十嵐が笑みを浮かべて立っていた。白衣男のせいですっかり忘れていたけれど、ここにも気の重いことがあったのだった。

葵は今更ながらも肩を丸めて小さくなる。

擬態でダメならもう透明人間にでもなるしかないか、とヤケ気味に思った。

「……おつかれさまです」

葵はぼそぼそと挨拶する。五十嵐は、そんな葵の様子を気にする風もなく、勝手に隣に座り込むと、目の前の丸尾にも明るく声をかけた。

「丸尾のおかげで見つけられた。今日も目立ってるな。ピンクのブラウス可愛いぜ」
「そう。ありがと」

すまし顔で答える丸尾をつい恨めしく感じてしまう。

同期で同じ年の二人は、入社当初から仲がいいらしい。

二人が仲良くするのは構わない。だけど葵自身は五十嵐には近寄りたくなかった。なぜなら彼は、女性に対してだらしなく、馴れ馴れし過ぎるのだ。

遠距離恋愛中の恋人がいるのに、「カノジョにめったに会えなくて寂しい。だから慰めて」なんてセリフを簡単に口にしたりする。それも、女性と見れば片っ端からだ。

特に葵に対しては酷いように感じられる。何かにつけて口説くようなことを言ってきた

たり、食事に誘ってきたり……。そういうノリが嫌いな葵にとつて、彼の言動は迷惑でしかない。

彼の軽口を、わかっついていて楽しんでる女性も中にはいた。しかも、会話だけで済んでいない、という噂もちらほら耳に入ってくる。

「あの調子の良さじゃ、どこに何人カノジョがいるかわかったもんじゃな。あんなのに引かかった恋人は気の毒ね」

仲のいい丸尾ですら、そんな風に言っているくらいだ。

ふくよかで柔らかな印象の見た目とは裏腹に、丸尾ははつきりとモノを言う。時に辛^し辣^{れつ}すぎるくらいの彼女の言葉だが、五十嵐に関する見解は正しいだろう。

今日も五十嵐は、食事そっちのけで葵の耳元に顔を寄せてきた。

「メガネかけない方がずっとイイ女だな」

湯気で曇ったレンズを拭いていた葵は、急いでメガネを顔に戻す。

無言で再びうどんをすすり始めた葵に向かって、五十嵐は楽しそうにぺらぺらと話しかけてくる。

「メガネなんかやめてコンタクトにしたら？ それとさあ、中森ちゃん、もつと明るい色の服着なよ。背、高いし絶対そっちの方が似合うと思うぜ」

それまで黙って食事をしていた丸尾が、不意に顔を上げて五十嵐に同意した。

「その意見には、私も賛成」

「だろー？」

丸尾は五十嵐に頷いて見せたあと、葵に向かって少し言いくさそうに切り出した。

「実は私も、気になっていたの。ここ最近の中森さん、これまで以上に明るい色を着なくなつたわよね？」

「えっ……」

正面に座る丸尾は、こちらに向かって身を乗り出し、問うような眼差しを向けてくる。「服だけじゃなくてメイクもよ。日に日に地味さに磨^{みが}きをかけちゃって……。きれいなのに、もつたいたいわ」

それを聞いた五十嵐は、目を細めてまじまじと隣に座る葵を見てきた。

「そーいやそーうだな。中森ちゃん最近地味すぎ。丸尾の言う通り服もメイクも、もつと明るくすべきだね」

できるだけ目立ちたくない葵としては、この話が続けるのは正直困る。

「私……あの、よくわからないので、今のままでも別に……」

葵は言葉を濁^{にご}した。丸尾はそんな葵をじっと見つめ、首を左右に振る。

「中森さんだつたら何でも着こなせるのに。そうねえ……赤やボルドーはどう？ きつと似合うわよ。ルージュは今よりもつと濃い色がいいわね。それだけで顔がハッキリ

する」

「ポルドーってどんな色だ？」

五十嵐が首を捻る。

「うーん、そうねえ。赤ワインみたいな色かしら」

「あー、なるほど。中森ちゃんが着たらかつこいいな」

「でしょ？ 中森さんはシュツとしてるから、濃いめの色もスタイリッシュに着こなせると思うの」

「丸尾にポルドーは……うん、止めた方がいいな」

「わかってるじゃない、五十嵐君。そうなの、残念だけど私はあの色が似合わないのよ」

二人は軽やかに会話を続けて頷き合っている。

やっぱりこの二人は仲がいいようだ。時々、厳しいことを言ったりするけれど、丸尾が彼のことを嫌っている様子は見られない。

このまま自分の話が終わってくれるようお願いつつ、葵は二人の話に耳を傾けながら無言で食事続けた。

「やっぱり女の子は華やかじゃなきゃね、中森ちゃん。——あつ、でもそうなる则他のヤロウも中森ちゃんに目え付けちゃうかあ」

他のヤロウ……ほんと白衣男が頭に浮かんできて、胸がざわつとする。

「どうした？ 中森ちゃん、変な顔して？」

「いえ、なんでもないです」

葵は焦って首をブンブンと振った。五十嵐が怪訝な顔をして、丸尾に視線を向ける。

「その何が悪いのよ。だいたい中森さんは今のままでも、ちゃんと他のヤロウから目を付けられてるわ。ついさっきだって、結婚を申し込まれたくらいなんだから」

「はあっ!？」

「丸尾さん！」

まさか暴露されるとは思わなかった。葵は驚いて箸を落としそうになる。

「結婚——って、中森ちゃんカレシできたわけ？ いったいどこのどいつだよ」

五十嵐が椅子をガタンと大きく鳴らして、凄^{すご}い剣幕でまくし立ててきた。それにより周囲の視線が集まるのを感じて、葵はこの場から逃げ出したくなってくる。

「ちよつと落ち着きなさいよ、今教えるから」

丸尾が呆れたように五十嵐を制した。そして、先ほどの白衣男のことをかいつまんで話す。

改めて聞くと、やっぱりからかわれたとしか思えない出来事だ。

「なーんだ」

話を聞き終えた五十嵐は、あからさまに気の抜けた声を出した。

「相手はあの海ボウズか。あれと結婚……っか、カレシにすんのもムリじゃね？」

「海ボウズ？」

丸尾が訝しげに声を上げた。

「そう。あの男、研究棟の海ボウズって呼ばれてんの。知らなかった？」

葵と丸尾が首を縦に振ると、まるで怪談話でもするみたいに五十嵐が声を落とす。

「ほら、髪の毛ばさばさでさ、なんかワカメかぶってるみたいだろ？」

ワカメ……？

葵は、先ほどの白衣の男性の外見を思い浮かべてみる。

言われてみれば、くせのある髪は濡れていたように思う。ワカメと言われればそう見えなくもない。

「それにぬぐっとでつかいし。だから海ボウズ」

抱き締められた時、目の前には相手の胸があった。つまり百六十五センチある葵よりも頭一つ分は、背が高いということだ。そう考えた途端、葵の胸がトクンと鳴った。背の高い自分にコンプレックスがあるせいで、高身長男性に弱いのだ。だけど、どんなに背が高くても……

「おまけに変人だから変人海ボウズさ」

五十嵐が得意げな顔をして付け加えた。

「やっぱり……変人」

葵は納得してつぶやいた。丸尾が興味津々の顔で五十嵐に尋ねる。

「ちなみに、どう変人なの？」

「丸尾く、あの見た目だけで十分だろ？ だいたい初対面でプロポーズとか、明らかにおかしいじゃないか」

五十嵐は呆れた様子でそう答えたあと、秘密を打ち明けるように二人の顔を見比べた。

「それに、もつとヤバイ噂もある」

「ヤバいつて……どんなですか？」

思わず葵が問いかけると、五十嵐はニヤリと片頬を上げてみせる。

「風呂の中で生活してるとか、白衣の下は、すっぽんぽんだとか……」

「それじゃあ変人通り越して変質者じゃないの。ただの噂話でしょ？」

丸尾がバカらしいとばかりに顔をしかめた。

「ま、俺もたまーに植物園で見かけるだけで、口をきいたこともないし。真偽のほどは定かじゃないんだけど」

五十嵐は気楽な調子で葵に言った。

「なにとはともあれ災難だったな。ああいうのにロックオンされたら大変かもよ？」

彼は手で作ったピストルで葵を撃つマネをして、笑顔で続ける。

「でも、中森ちゃんは俺が守ってやるから安心しな」

いつもの軽口だと思いつつも、葵はつい律儀に返してしまふ。

「い、いえ、大丈夫ですので、お気遣いなく……」

「遠慮するなよ」

「本当に大丈夫です。それに、五十嵐さんには他に大切な方がいるじゃないですか」

言外に、恋人がいるだろうと伝えた葵に、五十嵐はわざとらしいくらいにつこりと微笑んだ。

「大切なのは君だよ」

さすがに呆れて五十嵐に非難の目を向けてしまふ。その視線から逃げるように、五十嵐は顔を斜め上に逸らし、とぼけた口調で言った。

「あー、他にもいたいた。年の離れた妹だ」

遠距離の恋人はどこに行った？

「妹のことは家に帰ったら守るから、会社じゃ中森ちゃんを守ってやるよ」

そう言うって五十嵐は、「まかせておけ」とばかりに、葵の肩に手を置いた。

葵はさり気なく身を振ってその手を外す。すると、五十嵐は大げさに両手を上げて唇を尖らせた。

「ちよつと触っただけじゃん」

彼は誰に対しても同じように馴れ馴れしくボディタッチをする。

中には、それを喜んでいる女子社員もいるけれど、葵はちよつとだってイヤなのだ。本当は力いっぱい手を振り払ってやりたいけど……

先輩である丸尾と仲がいい五十嵐を、強く拒絶するのはためられた。

それに、こんな性格でも五十嵐は女性に人気があるのだ。日焼けした肌に甘いマスクをした営業部のホープ。おまけに話題が豊富で気さくに話しかけてくれるとくれば、女性に人気があるのもわからなくはない。今も、ちらちらとこちらを見ている女子社員が視界に入る。

葵は内心の苛立ちを抑えて目を伏せた。そんな葵の顔を覗き込み、五十嵐はうつすらと笑う。

「中森ちゃん、もつと男慣れした方がいいんじゃない？ なんなら、俺が練習相手になつてあげるよ？ 早速、今夜、食事でもどう？」

いつもこうだ。恋人がいながら、冗談でも他の女を口説く男なんて信用できない。

それこそ、葵の最も嫌いなタイプだ。

ふと視線を感じて顔を上げると、目の前の丸尾が冷ややかな視線を五十嵐に向けていた。

「中森さんみたいな真面目な子を、冗談で口説いたりするもんじゃないわ」
真剣な口調の丸尾に対して、五十嵐はどこか挑戦的な笑みを浮かべる。

「冗談なんかじゃないぜ。中森ちゃん、俺と付き合う？」

ニヤニヤしながら言われても、冗談としか聞こえない。けれどその冗談に合わせて、軽くイエスと答えるなんて葵にはできない。だからどうにか言葉を濁しながら本心を伝えた。

「遠慮しておきます」

「ほんと真面目だなあ、中森ちゃんは。色んな男と付き合ってみるのも経験だぜ」

そう言って、はははと五十嵐は笑っている。

葵は見えないようにため息をついた。

ああ、早く家に帰ってお風呂に入りたい……

まだ月曜日の昼だといふのにどっと疲れを感じて、そんなことを思う葵だった。

勤務終了後。早々に帰宅した葵は、早速お気に入りの入浴剤を溶かしたお湯に浸かった。

「ふ〜っ、生き返るわあ……」

葵は大のお風呂好きである。それは、大学時代に温泉同好会に入っていたほどの筋金

入りだ。

以前はよく温泉に行っていたが、社会人になってからはなかなかそうした時間も取れなくなっている。

今もつばら、入浴剤を入れたお風呂で手軽な温泉気分を味わうのが毎日の楽しみとなっていた。それにこれは、ストレス解消にも有効なのだ。

その日のストレスは、その日の内にお風呂で溶かすに限る。

「もうちょっと湯船が大きかったらなあ」

ひとり言をつぶやきながら、キラキラ光るお湯を手ですくって肩にかけた。薄く開けたルーバー窓からひんやりとした外気が入ってきて、目を閉じると露天風呂に浸かっているみたいだ。

「ああ、いい気持ち」

今夜の入浴剤は、今一番気に入っている『草の湯』にした。値段は高いけれど、それに見合うだけの素晴らしい効能が期待できるのだ。

たっぷりの生薬しょうやくで肌はすべすべになるし、芯から温まって疲れも取れる。おまけに、寝つきも良くなって、いいことづくしだ。

葵は湯船の縁にくたりともたれて、ゆっくりと目を閉じる。

いつもなら、お湯に浸かるとすぐに頭の中を空っぽにすることができた。なのに、今

日はそれが上手うまくいかない。
それはきつと、五十嵐だけでなく白衣男のことまで頭に浮かんでくるからだろう。
五十嵐の調子の良さを思い出すとげんなりするが、それ以上に白衣男の言動が気がかかった。

あんなプロポーズ、まさか本気じゃないわよね。

葵は胸の前で両手を握り、真剣に願う。

どうかこのまま何も起こりませんように！

「大丈夫……だよね……」

葵は自分に言い聞かせるように声に出すと、顎あごまでお湯に浸ひかったのだった。

翌日の火曜日。

朝一番に出社した葵は、早速日課の掃除を始めた。しかし――

「おはよう、ございますっ」

息を弾ませた男性のひと声で、昨夜の願いが叶わなかったことを悟る。

恐る恐る庶務課の入り口に顔を向けると、そこには昨日の白衣男が立っていた。

ちょうど出勤してきた江田島と渡辺が、入り口に立つ男を見てびっくりしている。

それもそのはず。男の姿は、昨日よりいっそうインパクトが増していた。

長めの黒髪はびっしりと濡れて水を滴したらせている。さらには、白衣から覗のぞく素足に、ビーチサンダルを引っかけていた。野暮やぼったい黒縁メガネは、レンズが汚れているのか変な風に光を反射して、男の表情がまったく見えない。

「中森葵さん」

男はカウンターまで進み出て、はっきりと葵の名を呼んだ。

「話を聞いてほしい」

カウンターのすぐ内側にいた葵は、ハンディモップを頼れる武器であるかのようにギョツと胸の前で握り締める。

「……な、なんででしょうか？」

「俺の名前は鈴木晋也すずきしんや。入浴剤開発室勤務で、入社七年目の三十一歳だ。昨日は名乗りもせずに失礼した。君を見つけたことで脳が興奮状態おちいに陥り、自己コントロールが効かなくなっていた」

そう言うなり男は葵に向かってすつと頭を下げた。

「いきなり驚かせてしまい、申し訳なかった」

彼の行動に驚くとともに、葵はほっと小さく息をはく。インパクトのある外見や噂と違つて、どうやらまともな思考回路の持ち主のようだ。

「俺としたことが、興奮するあまりすつかり肝心なことを忘れていたとさつき気が付い

て、急いでバスタブを抜け出して来た」

「バスタブ？」

怪訝けげんに思った葵は首を傾げた。

「仕事で風呂に入っていたんだ」

ああ、だから髪が濡れているのか——って、ちょっと待って。この人いったい何時から仕事しているの？」

「プロポーズの前にまずは交際を申し込むべきだった」

「え？」

ポカンと口を開けた葵に向かって、男はまっすぐに告げた。

「中森葵さん、俺と交際してくれ」

「あらまあ」

ハツとして出入り口を見ると、パートの二人が興味津々きょうみしんしんで自分たちを見つめているではないか。

「あっ、あの……ちょっと待って！」

狼狽ろうばいした葵はそう声を上げると、急いでカウンターを回り込んで男に駆け寄った。

「こんなところで困ります」

「なぜだ？」

「なぜって……周りに他の人がいるのに」

「他の人がいたら、何かまずいのか？」

平然と聞き返されて、葵の方が面食らってしまう。

「えっ……だって、恥ずかしいでしょう？」

「最高の女を手に入れるための言動に恥ずかしいことなどない。恥ずかしがっている間にチャンス逃したらどうするんだ」

男はそう言って堂々と胸を張る。

前言撤回！ やっぱり変わり者だわ！

そう思いながらも、気付けば男のセリフに胸がドキドキしてくる。

そんな自分にうろたえ、熱くなった頬を左手で押さえた。何故か上手く言葉が出てこず、葵はおろおろと視線を泳がせる。すると、自分たちを見つめるパートの二人とぼちりと目が合った。彼女たちは口元に笑みを浮かべ、期待に満ちた視線を向けてくる。急激に恥ずかしさが込み上げてきて、葵は慌てて白衣男の袖をぐいっと強く引く。

「外、外に出ましよう！」

白衣男——鈴木を引っ張って、葵は庶務課を後にした。

出勤時刻ともあって、通路にはかなりの人が行きかっている。そんな中、鈴木の外見はやはり目立ち、通り過ぎる人たちがちらちらと好奇の視線を向けてきた。

邪魔にならないよう通路の端に寄り、葵は男に向き直る。

「あの、鈴木さん、でしたっけ？」

「そうだ。改めて言う。中森葵さん。俺と交際してくれ」

何かに急ぎ立てられるようにそう口にした鈴木は、薄い唇を真一文字に結んだ。

青白くコケた頬に緊張の色が見てとれる。それだけでも、彼が真剣であることがひしひしと伝わってきた。言動はかなり突飛ではあるが、葵に好意を持っているのは本当のことだと感じられる。毎日のように、へらへら笑いながら自分を口説く五十嵐を見てきたせいか、正々堂々とした鈴木の状態には好感が持てた。

そうは言っても、自分はよく知らない男性といきなりお付き合いができるような性格ではない。

それに……この人はもの凄く人の目を引く。今だって、周りの視線が気になって仕方がない。葵はここで絶対に目立ちたくない。でも、もし万が一この人と付き合うことになつたら……想像しただけで怖くなる。

葵はがばつと頭を下げ、ひと息に告げた。

「ごめんさい。交際はできません」

彼は昨日のことをきちんと謝った上で、真剣にもう一度告白してくれた。この人に対して、今の葵ができることは、変に言葉を濁さずに、きっぱりお断りすることだけだ。

目の前の鈴木が硬直したのがわかった。

彼はごくりと喉を鳴らすと、焦つたように葵に問いかけてくる。

「なぜだ？ 恋人がいるのか？ まさか結婚しているのか？ 頼む、理由を聞かせてくれ」

葵は鈴木をまっすぐに見つめて口を開く。

「私、鈴木さんのことを何も知りません。鈴木さんもそうですよね？ 私は知らない人といきなりお付き合いすることはできません」

葵ははつきり告げた。ところが……

「何も知らなくても大丈夫だ。俺と君との相性は最高だとわかっている。それはすでに確認済みだ」

鈴木は自信満々に胸を反らせると、葵に向かって大きく頷いて見せた。

相性のいい異性はいい匂いがする——って説だっけ？

「匂いで相性の良さがわかるなんて……私には信じられません」

「ふむ。では、それを証明するために行われた実験について教えよう。簡単なものは——」

「ちょっと待ってください。仮にその説が本当だったとしても、証明にはなりません。私、香水だつてつけてないし、匂うなんて言われて、正直ちよつとイヤな気分です。鈴

木さんの気のせいってことはないんですか？」

「気のせいだと？ それは聞き捨てならん。だったら、俺の嗅覚が特別だということ
をまず証明してみせよう」

鈴木はそう言うなり、ずいっと葵との距離を詰めてくる。彼の勢いに思わず後退さつた時、突然後ろから肩を掴まれた。

「おはようございます」

「きゃっ！」

葵は驚きのあまり、その場でびよんと飛び上がる。

「丸尾さん!？」

「驚かせてごめんさい。立ち聞きしたわけじゃないんだけど」

そう言いながら、丸尾は葵の肩を押して鈴木と正面から向き合わせる。

「えっ、丸尾さん……何を……」

丸尾はすつと手を伸ばすと、葵が未だに握り締めていたハンディモップを取り上げた。

「ねえ、交際を断るにしても、この人の特別な嗅覚について知りたいと思わない？」

真面目な顔でそんなことを言ってくる。そりゃあ葵だつて特別な嗅覚とやらが気にならない訳じゃないけど……葵は鈴木と丸尾の顔を交互に見た。二人は揃つて葵に頷いてみせる。

戸惑いつつも、葵はこくつと頷いて鈴木に向き直った。こうして正面に立つと、彼の背の高さを改めて意識して、ちよつとそわそわする。

鈴木は葵を柔らかく引き寄せると、肩に手を置いて首筋に顔を近づけてきた。

まるで吸血鬼が血を吸うポーズみたいだ。反射的に身体を仰け反らせると、背中に鈴木腕が回され、ぐいと抱き寄せられた。

今にも胸が密着してしまいそうな体勢に、葵の心臓が暴走を始める。

どうかこの心臓の音が彼に聞こえませんか……

そう願いながら、葵は震える膝を必死に伸ばしてその場に立ちつくす。

首筋に鈴木顔が近づいてくるのを感じる。たまらず葵は胸の前で手を握り、ぎゅつと目を閉じた。鈴木は何度か深い呼吸を繰り返したあと、静かに口を開く。

「中森葵さん、君は昨晚、入浴剤の草の湯を入れた風呂に入ったね。昨日も思ったが、

一昨日の晩もそうだったな」

鈴木は吐息が首筋に触れ、葵はぶるつと身体を震わせた。

「あ、当たってます」

答える声が上がってしまう。動揺する葵をよそに、丸尾が冷静な口調で意見する。

「草の湯はうちの製品だし、そんな社員はたくさんいるんじゃない？」

鈴木は集中しているのか、それに答えることなく、葵の首筋から鎖骨に顔の位置をず

らした。

「ふむ、君は風呂の残り湯を使って洗濯をしているのか。洗剤はウルトラホワイト、柔軟剤はソフワンのアイリスの香り……」

葵は内心で驚愕する。全て鈴木の言う通りだ。

「ついでにボディソープはビアレ、シャンプーとコンディショナーはカメラリア」
うそっ！ 本当に匂いを嗅いだだけでそこまでわかるものなの!?

「あと……髪をまとめているのは、ブーケ形状記憶成分入り、スプリングフラワーの香りだ」

あまり的中率に、逆に恐ろしくなってくる。自信満々に言う通り、確かにこの人の嗅覚は特別らしい。

「どうなの中森さん？ 当たってるの?」

丸尾が焦れたように声を上げた。

「はい……全部」

頬を引きつらせながら答える葵に、丸尾は感心した風に声を出した。

「本当に凄い嗅覚をしているのね……。じゃあ、中森さん自身はどんな匂いなんですか?」

丸尾の質問に、鈴木の口元がふっとほころぶ。

立ち読みサンプル はここまで

「そうだな……俺にとっては一種の麻薬だな」

夢見るみたいな声で言いながら、鈴木が葵に向かってそっと手を伸ばしてきた。

大きな手だ。白くて骨ばった長い指をしている。

あ……やっぱりこの人の手、凄くきれい。

鈴木の手先が、ほつれて頬にかかった葵の髪を耳にかけてくれる。

そのまま自然な動きで葵の首の後ろに手を回し、まるでキスをするように傾けた顔を近づけた。彼は葵の耳元ですんっと息を吸い込み、ほうっと熱い吐息をこぼした。

その吐息に酔ったのか葵の頭がぐらくらする。無意識に目の前の白衣を握り締めると、鈴木の声が耳朶をくすぐった。

「いつまでも嗅いでいたくなる心地いい香り。ほっと安心する香りのようで、時に妖艶に俺の胸をざわつかせる……それが葵の匂いなんだ」

うっとりとした鈴木の声が葵の耳から入り込み、全身を痺れさせる。

いつの間にか、彼の声は甘く低くなっていた。

さっきまでは、いかにも理系って感じの硬い口調だったのに……

それを意識した途端、早鐘を打っている胸がきゅうっと締め付けられた。

「あ、課長だわ」

ぼうっとした葵の耳に丸尾の声が飛び込んできた。我に返った葵は、急いで鈴木から